

巻 頭 言

今年度も「年報」をお届けできることを喜んでおります。本誌に掲載された論文は昨年仙台で開催された本学会総会並びに研究発表会において、発表されたものであります。

そのいずれもまことに興味ある課題について、しかも科学的なアプローチで、論考を進めている論文であります。

研究論文の価値は、課題(テーマ)の立て方とその捉え方、仮説(推測)の大胆さ、そして論述における整合性(論理性)によって評価されるものと考えます。

これらの観点から、わが学会の年報に掲載されてきた論文は高い評価に値するものと自負しております。

しかしこのような評価を維持するためには、会員各位の努力は言うまでもありませんが、最も重要なことは、各会員が他の会員の論文に対する合理的批判をためらわないことであると考えます。つまり会員がお互いに他の論文の(利点というよりはむしろ)欠点を、わだかまりなく指摘し、それをめぐって議論をすることです。この点について、毎年の年会における討議風景は望ましい方向に向かっていると思います。

わが学会には若い世代の会員が大勢おられます。これらの方々が今後お互いに刺激し合って、すぐれた研究業績を挙げられますことに大きな期待を寄せて、巻頭のことばといたします。

世話人代表 竹内 芳男
(山形大学教育学部長)